

【参加した教員の感想文】

「東日本大震災被災地支援」に関するボランティア活動に参加して

県立高円高等学校 教諭 上地英晃

第1日は女子の班とともに気仙沼向陽高校の生徒との交流を軸に「記憶の街」ワークショップに参加した。航空写真から、津波で失われた町並みを模型で再現しようというプロジェクトで、神戸大学大学院が中心となってすすめている。がれき処理のような重労働を想像していたので少々肩をすかさされたようにも感じた。製作の過程には被災された市民の人達からの聞き取り作業もある。記憶を語り合い、一軒一軒位置や屋号を確認して生徒に指示をする市民の人たちは、作業を通して街や家族を失った喪失感を少しでも埋めて街の再建に前進しようとしているように感じた。力仕事だけが支援ではないと思った。

向陽高校は水産科を含む実業高校だが、引率の先生が「3つの高校に間借りして明日から新学期が始まります。実際は実習用の機器が使えないので・・・」と力なげに話されて、「では、職員会議があるのでしばらく席を外します。」と言って足早に会場を去るときの後ろ姿が、語調と対照的に力強くたくましかったのが印象的だった。

「東日本大震災被災地支援」に関するボランティア活動に参加して

県立西の京高等学校 養護教諭 中川雅永

今回、高校生とともにボランティア活動に参加し、私自身いろいろなことを感じ、考えさせられたよい機会であった。

奈良から岩手までバスで約12時間かけ、ボランティアに参加した。バスでの長旅であったにも関わらず、高校生たちはとても元気に作業を行ってくれた。

岩手県一関に到着したときは、震災の跡は感じられなかったが、陸前高田に近づくにつれ、被害の大きさに驚くばかりであった。陸前高田の市街地を目の当たりにしたときは、言葉にできない衝撃を受けた。

現地での活動は、草刈り、泥のかき出しなどであった。生徒たちは黙々と作業を行い、地面の中から現れるアルバム写真や子どもの衣類などを見つけては、いろいろな思いを巡らしていた。

現地2日間という短い期間ではあったが、ほんの少しでも被災された方の役に立てたのであれば、このボランティア活動は意味のあるものになったと思う。一人一人の力は小さいけれど、みんなで力を合わせることで大きな力となるので、高校生の溢れるエネルギーを被災者のために役立ててくれたら、より一層の成長に繋がると確信している。このボランティア活動が今回の参加者だけに止まらず、さらに多くの高校生に広がり、高校生の絆が深まっていくことを願っている。

「東日本大震災被災地支援」に関するボランティア活動に参加して

県立奈良情報商業高等学校 教諭 喜多 純

目的地に近づき、車窓の景色に私たちの視線と車内の空気は凍りついた。何もかも全てを飲み込んでしまった静かで穏やかな表情の海。建物一つすら残っていない。飛び込んでくるのは、瓦礫を片付ける重機の音のみ。東日本大震災の被害の大きさを瞬時に感じ取れた。そして、車中の話し声は途絶えた。

陸前高田は、海沿いの美しい田園風景の町であったと想像できるが、今は、田畑に覆い被さる大量の土砂とその上に生い茂る雑草。私たちは、雑草を取り除き、土砂をかき出し、埋もれる遺品を一つずつ拾い上げた。茶碗などの生活用品、幼い子供の衣服、卒業アルバム等。震災前の生活が私たちの手元に浮かび上がってきた。誰もが声に出さず、耐え難い思いのまま、ひたすら作業を続けた。

参加者の一人に、汚泥にまみれ黙々と土砂をかき上げ続ける男子生徒がいた。その生徒は、「私にも何かできることはないか」と思い、一人で参加してきたと言う。被災地で私たちが行った支援は、ほんの小さな事かもしれない。しかし、私たちは、被災地から尊い命や自然の畏るべき力について教えられ、その一方で、人と人との間に芽生える助け合いの心についても考えさせられた。それは、活動を通して、誰もが無言のうちに感じ取ったものであった。

参加した生徒たちは、瓦礫はこの地で生活された方々の宝物だと大切に取り扱い、協力し合い、泥にまみれても常に笑顔で活動した。この生徒たちの心は、亡くなられた方々へのせめてもの供養と復興への力になるものと信じている。

「東日本大震災被災地支援」に関するボランティア活動に参加して

県立五條高等学校 教諭 西 英樹

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県陸前高田市と宮城県気仙沼市を県内高校生ボランティア隊の引率で参加させていただいた。目的地までは長い道のりであったが、各生徒たちは目的意識を持ち参加していることがバスの車中でも感じられた。現地に着くと想像を絶するものであり、言葉を失った生徒もあった。しかし、作業に入ると黙々とする姿が今でも目に焼き付いている。初日、8月18日は、気仙沼で女子の活動に同行した。気仙沼向洋高校との交流会で「奇跡の街」という、模型づくりやまちあるきを行い、気仙沼の街を見学することができた。ここでは、現地のガイドをおこなってくださった方が、震災当時の話をしていただいたり、なかなか行けないような所まで案内していただいた。生徒たちは、見る物や聞く事が余りにも衝撃的であったため無口になってしまった。その後、お互いの交流を深め、感想を述べあい終了した。2日目、19日は、男子の引率として、陸前高田市に向かった。山際の瓦礫等の撤去を生徒たちと一緒に作業を行った。小雨の中で、作業を行ったので、マスクやカッパなどはすぐに濡れてしまった。しかし、生徒たちは力を合わせて連携を取りながら作業を行い荒れ放題だった場所も数時間の間にきれいになった。復興に向けて力を合わせる大切さを実感した。

参加した生徒たちは、今回の活動を通してさまざまな事を感じてくれたと思う。各学校に戻り、報告会など通し、更に支援活動を活発化して欲しいと思う。私自身も高校生と一緒に貴重な体験をした。これを通し、多くの高校生と話をすることもできた。また、自校の生徒会活動をもっと活性化させていきたいという気持ちが高まった。

『東日本大震災支援ボランティア活動に参加して』

西大和学園高等学校 教諭 中浦守浩

声を失うような惨状が待っていました。床は抜け、畳、タンス、食卓らしきもの、更にはどこから流れ着いたかも分からない、漁業の道具までも、家の内に外に、散乱していました。本当に津波の恐ろしさを実感する光景。この光景は、私たちがボランティア活動をしている水田の横にある仮設住宅で暮らしているという80歳近くの老婆が持ち主の家でした。数か月ぶりに帰宅した老婆が私たちにボランティア活動のお願いをしてきたのです。しかし、状況の悲惨さから、その老婆の痛いほどの願いに、私たち高校生のボランティアは応えられないのです。このような被災者からの要望は、まず被災地のボランティアセンターの方々に伝えられ、状況を把握したセンターのスタッフたちによって、支援者とのマッチングを行うのです。しかし、私たちの訪れた陸前高田市は、市職員の方々も半数は被災し、亡くなられています。他の地域の職員の方々もたくさん駆けつけ、復興への歩を進めようとしているのですが、いわゆる土地勘のない者では分かりにくい状況が多々あり、さっきのマッチングも含め、まだまだ手がつけられていない場所も多いのです。

今回の、高校生によるボランティア活動の内容の大半は「草刈り」でした。しかしこの「草刈り」には、単なるそれとは違う、もっと大きな意味があるのです。草刈り機など使えるわけがありません。なぜならば被災した人の大切な思い出の品が、その生い茂った夏草の下に、数多く眠っているからです。生活の息づかいがそのまま感じられるような、思い出の品々。今回参加した生徒たちはその一つ一つを手に取り、目で確かめながら、何か強い思いに、胸を打たれているようでした。そして、できる限り、もとの持ち主に返してあげたいという願いを込めて、私たち教員に、「これ、ちゃんと返せますよね」「これはどうしたらいいですか」と、確認してくるのです。時には涙あふれんばかりの声で、確認してくるのです。

遠く離れた奈良では、震災から5ヶ月が経ち、もうすでにかなり復興したのではないかと思いがちですが、このように支援の手を待っている方々は、まだまだたくさんいらっしゃいます。また、重機ではできない、思いやりの手を差し伸べるといような、人の手でしかできない、きめ細やかな作業もまだまだ多く残っているのです。

今回この企画に参加させていただき、現地に行った者にしか分からないようなことを、数多く学びました。今回の活動を通して感じたことを、たくさん生徒たちに伝えたいと考えていました。しかし私が出る幕はありませんでした。同行した本校の生徒会長・副会長の2名が、2学期の始業式に全校生徒の前で、私が感じたこと、いやそれ以上のすばらしい気持ちを語ってくれたのです。その様子を見て、生徒を参加させたことを、本当に良かったと実感しました。

挫けず頑張ろうとする東北の人たち、その東北を支援しようと日本各地でその輪が広がっていること、特にその中でも高校生や大学生などの若い者の力を感じました。私自身もそれに負けず、微力ではありますが、これからも何か一つでも復興のために協力してきたいと考えさせてくれた4日間でした。